

## 意見文における意見の類型とその変遷 —国語教科書（1960年代～2010年代）のモデル作文を資料として—

前川孝子

### 要旨

日本語教育においてどのような意見文を目標とすべきかを考察するためには、その一段階として、これまで意見文においてどのような類型の意見が求められてきたかを明らかにすることが必要である。そこで、日本語母語話者が意見文を書く際に模範として提示される学校教科書の中の意見文のモデル作文を資料とし、以下の調査を行った。大西（1990、1997）に基づき、1960年代から2010年代までの学校教育（小学校・中学校・高等学校）の国語教科書の意見文のモデル作文を、意見の類型によって「感想型意見文」、「思索型意見文」（「探求思索型意見文」「二項対立思索型意見文」「疑問解明思索型意見文」の下位分類がある）、「解決型意見文」に分類した。そして、学校の段階別（小学校・中学校・高等学校）の傾向とそれぞれの経年的変化を観察した。その結果、学校の段階別にかかわらず、感想型意見文に減少傾向が見られ、他の意見文に推移していることが分かった。

### キーワード

意見文、意見の類型、モデル作文、学校教育、国語教科書

### 1. 調査の背景と目的

これまでの日本語教育においては、日本語母語話者や日本語学習者が書く意見文がどのような傾向の構造を有するのかということが注目されてきた。佐々木（2001）、二通（2001）、Lee（2006）、伊集院・高橋（2012）らが、日本語母語話者や日本語学習者が実際に書いた作文を対象にして意見文の構造研究を行ってきた。いずれにおいても、日本語母語話者は作文のはじめと終わりで主張を述べるものが多いという点で一致している。しかし、どのような文章構造を持った意見文が目標とされてきたのか、さらには日本語教育においてどのような意見文を目標とすべきかということは注目されていなかった。

意見文の構造を明確化するためには、実際に書かれた意見文ではなく、そもそも意見文として模範とされているものを特定する必要があると考える。さらにはその前提として意見文における「意見」とは何かを同定し、意見の類型ごとに意見文を分類できるように、分類基準を明確にする必要があると考える。

そこで本調査では1960年代から2010年代までの学校教育（小学校・中学校・高等学校）の国語教科書の意見文のモデル作文を分類し、学校の段階別（小学校・中学校・高等学校）の傾向とそれぞれの経年的変化を明らかにする。

調査資料として、国語教科書を選定したのは、日本語を母語として学んだ一般の日本人が、意見文を書こうとする場合、見本として提示されているものであり、意見文とは何かを同定する上で参照すべきものと考えられるからである。国語教科書に掲載されている意見文のモデル作文は日本の学校教育を受ける児童・生徒・学生が習得すべき到達目標であ

るだけでなく、その文章構造は日本語学習者にとっても、理解し習得すべき目標と考える。更には、日本語学習者も母語話者もともに日本語を介してコミュニケーションを行う以上、母語話者の日本語使用の実態は日本語教育にも反映されると考えるからである。

## 2. 調査概要

### 2.1 調査資料

調査は戦後、制度が整った1950年（昭和30年）代以降の学習指導要領<sup>(1)</sup>に基づく、小学校5・6年生、中学校全学年、高等学校の科目名「古典」と「現代語」を除く教科書で学習指導要領の施行年から随時使用開始された教科書全623冊から意見文のモデル作文とみなしたものを対象に行った。

本調査でのモデル作文とは、意見文を書くことを目的に例示された見本の作文のことである。国語の学習指導要領には、「意見を述べる」、「意見を書く」といった記載や、意見・主張を筋道を立てて記述する、自分の考えについて根拠を明確にして書く、といった趣旨の記述はあっても、“意見文”という文章ジャンルについての記述が見当たらない。

そこで、作文の学習目標に“意見”、“主張”、“考え”というキーワードが記載されているものについては、意見文と明示されていなくても意見文と見なした。一方、以下のものは除外した。

- (1)意見文を書く前段階として、意見を形成するために紹介されている。
- (2)意見文を書くための、読解資料として掲載されている。
- (3)全文が掲載されていない。
- (4)3行以内の短作文である。

### 2.2 意見文の定義及び分類基準

本節では、はじめに大西（1990、1997）における行動原理としての意見の類型を述べ、本調査における分類基準を示す。

本調査では、作文産出におけるアイディアの創出と組織化である「創構」過程の行動原理として大西（1990、1997）が指定した「感想型意見」、「思索型意見」、「解決型意見」の3つの意見を、意見文のタイプを示す指標となる意見の類型としてとらえ直し、これをもとに分類を行う。大西（1990、1997）の「感想型意見」とは、「感想文といわれるジャンルの中核的な内容をなすもの」（1997、p.224）である。「思索型意見」とは、「内的問題・障害の解決に主体の意識が向かうところに生み出されたもの」（1997、p.225）で、「内面的行動に向かって作用するもの」（1997、p.224）である。「解決型意見」とは、「外的行動化を促す方向に作用するもの」（1997、p.224）で、「問題事象を客観的に把握し、その生起する原因を追究し、解決策を講ずる」（1997、p.225）一連の過程のことである。

本調査では、大西の行動原理としての意見の定義と分類を、意見文の類型に適用する。そして、図1に示すように意見の類型ごとに分類した意見文を「感想型意見文」<sup>(2)</sup>、「思索型意見文」、「解決型意見文」の3つに大別し、さらに「思索型意見文」を「探求思索型意見文」「二項対立思索型意見文」「疑問解明思索型意見文」の下位分類に分ける<sup>(3)</sup>。この3つの下位分類を設定した理由は、意見文の内容の違いを示すためである。

以下、類型化した意見文について例を用いながら述べる。

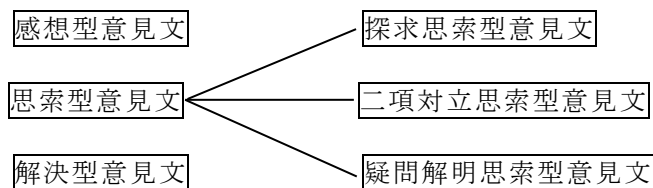


図1 本調査における意見文の分類

感想型意見文とは、例1のように根拠に基づき意見を述べるもののうち書き手の主観的感想や印象を述べているものである。ただし、探求思索型意見文のような反論、再反論を通じた主張の証明の文章を含まないものをいう。

### 例1 感想型意見文

段落	文	意見文
1	1	大学の交換留学でオーストラリアで学んでいる。
	2	ここでのわたしの楽しみの一つは手紙をもらうことだ。
最終	14	電子メールの台頭で手書きの手紙が衰退してきている。
	15	手書きによる手紙がなくなることを願う。

(作品名「異国での喜び、手書きの便り」、2003年、高等学校 国語総合)

探求思索型意見文とは、根拠に基づき意見を述べるとともに、書き手が意見の正当性を証明するために自分の意見とは相反する意見を取り上げ、その意見に対し自身の意見を述べ、自身の意見が正しいことを証明する文章が含まれるものである。例2では、第5段落・文番号10「確かに方言は、～伝わらないかもしれませんが。」が反対する意見であり、同段落・文番号11・12「しかし、～味気ないものになってしまうと思うのです。」が反対意見に対し書き手が自身の意見が正しいことを証明する文章となる。

### 例2 探求思索型意見文

段落	文	意見文
1	1	私は、もっと方言を大切にすべきだと思います。
	2	それは、方言が共通語に比べて軽んじられている傾向にあると思うからです。
5	10	確かに方言は、その土地に暮らす人にしか正確な意味は伝わらないかもしれませんが。
	11	しかし、正確な意味は伝わらなくとも、その人の気持ちの表現として、また、その土地の暮らしの表現として、方言は大切なのではないのでしょうか。
	12	それを全部なくして共通語にしてしまったら、私たちの暮らしは味気ないものになってしまうと思うのです。
6	13	方言には方言のよさがあります。
	14	そのよさを見直して、私たちは積極的に方言を残していくように努力すべきだと思います。

(作品名「方言の『よさ』を見直そう」、2012年、中学第2学年)

二項対立思索型意見文は、所定の課題についてその是非を答える意見文である。具体例としては、例3第1段落・文番号1のように、賛成する・反対するという書き手の立場が書かれ、論拠(同第1段落・文番号2)をもとに述べるものである。探求思索型意見文と

相違する点は、書き手が意見の正当性を証明するために自分の意見とは相反する意見を二項対立の形で示すことである。具体的には、探求思索型意見文では、「もっと方言を大切にすべきだと思います。」(例2、文番号1)という書き手の意見に対し、「方言を大切にすべきではない」と相反する文が書かれていない。しかし、二項対立思索型意見文では、「日本人は日本語と英語を併用するようにはすべきだという議論があるが、わたしはこれに賛成である。」(例3、文番号1)との文に対し、対立する意見の文「英語は必要ない」(例3、文番号11)が書かれている。

### 例3 二項対立思索型意見文

段落	文	意見文
1	1	最近、これからの日本人は日本語と英語を併用するようにはすべきだという議論があるが、わたしはこれに賛成である。
	2	なぜなら、英語は地球規模の共通語になりつつあるからだ。
5	11	外国で仕事をしないから英語は必要ないという人がいるかもしれないが、外国企業の日本への進出も珍しくなくなり、日本で生活する外国人の数はますます増加している。
	12	日本の中でも国際化が求められているのである。
最終	13	そのためにも、これからの日本人は日本語と英語を併用できるようにすべきだと思う。

(作品名「日本人は英語を併用すべきだ」2003年、高等学校 国語総合)

疑問解明思索型意見文とは、自ら見出した疑問(例4第1段落・文番号1、2)に対して、論拠をもとにその疑問への答えとなる意見を述べるものである。

### 例4 疑問解明思索型意見文

段落	文	意見文
1	1	現在の私たちの生活には物があふれ、欲しいと思えばさまざまな物がすぐ手に入る。
	2	あり余るほどの物が流通する時代に育ったことは、現代の高校生に非常に大きな影響を与えているのではないだろうか。

(作品名「物に頼らず、心で人に接しよう」2013年、高等学校 国語総合)

最後に、解決型意見文とは、ある課題や問題(例5第2段落・文番号3、4)に対して具体的対策や提案(同最終段落・文番号10)を述べるものである。

### 例5 解決型意見文

段落	文	意見文
2	3	このような省略語が広まると本来の表現が忘れられてしまうおそれもあります。
	4	日本語を正しく使うという観点からも、あまり好ましい現象ではないと思います。
最終	10	少なくとも記者が書かれる新聞記事の中では使わないほうがよいでしょう。

(作品名「新聞は省略語を使わないで」2013年、高等学校 国語総合)

## 2.3 調査

2.2の分類基準に基づき、本調査では、以下3つのことを行う。

- (1) 対象資料 623 冊の中から、調査対象に該当するモデル作文を探す。
- (2) 調査対象の意見文を「感想型意見文」、「思索型意見文」（下位分類として「探求思索型意見文」「二項対立思索型意見文」「疑問解明思索型意見文」）、「解決型意見文」に分類する。
- (3) 学校の段階別（小学校・中学校・高等学校）の傾向とそれぞれの経年的変化を観察する。

### 3. 結果

調査の結果、対象とした教科書 623 冊のうち、124 冊の教科書に調査対象に該当するモデル作文が掲載されていた<sup>(4)</sup>。モデル作文は 153 作品であった<sup>(5)</sup>。

表 1 は、学校の段階別による年代別のモデル作文の実数である。

表 1 年代別のモデル作文の実数（単位：作品）

	1960 年代	1970 年代	1980 年代	1990 年代	2000 年代	2010 年代	計
小学校	0	1	13	8	8	11	41
中学校	10	21	4	8	10	7	60
高校	0	0	6	17	18	11	52
計	10	22	23	33	36	29	153

表1より、意見文自体がモデル作文に取り上げられる推移を見てみると、小学校のモデル作文は1970年代に出現する。小学校では1970年代の1作品に対し、1980年代に13作品と激増している。その後は微減するが2010年代は11作品と増加している。中学校では1960年代からモデル作文が取り上げられ、1970年代にほぼ倍増する。1980年でモデル作文の数は大幅に減ったが<sup>(6)</sup>、1990年代以後の数は安定している。高等学校では1980年代（6作品）より取り上げられ、1990年代に17作品と増加し、2010年代には減少している。

図2-1、2-2、2-3は学校の段階別による各年代の各意見文の割合である。また、表2から表4は学校の段階別による年代別での各意見文のモデル作文の実数である。

小学校のモデル作文は2000年代以後、感想型意見の出現率が減少傾向にある。代わって思索型意見文（特に二項対立思索型意見文）が増加の傾向にある。探求思索型意見文は2010年代に出現する。解決型意見文の出現も僅少である。疑問解明思索型意見文は一定程度出現するが、低い割合である。

中学校のモデル作文は1960年代から出現している。1960年代では、感想型意見文の割合が60%以上を占めていた。1970年代に感想型意見文の割合が低くなると替わって解決型意見文が出現した。1980年代は、探求思索型意見文が半数を占める。1990年代は再び感想型意見文が増えるが、2000年以降は減少し、二項対立思索型意見文が増加している。

最後に、高等学校のモデル作文は1980年代から出現する。この段階では感想型意見文が50%で、残りの50%を探求思索型意見文と疑問解明思索型意見文が占めていた。続いて、1990年代では解決型意見文が出現するものの思索型意見文の合計が感想意見文と同じ割合を示す。2000年以降になると感想型意見文が減少し、探求思索型意見文と疑問解明型意見文がそれぞれ30%前後を占める。

以上のとおり、各意見文を経年的にみると感想型意見文が減少傾向にあり、替わって思索型意見文へモデル作文が推移している。小学校では2000年代より二項対立思索型意見文が出現し、中学校でも二項対立思索型意見文が増加している。高等学校では探求思索型意見文が一定程度を占め、疑問解明型意見文が増加傾向にある。解決型意見文は、中学校・高等学校では一定の割合を占めている。

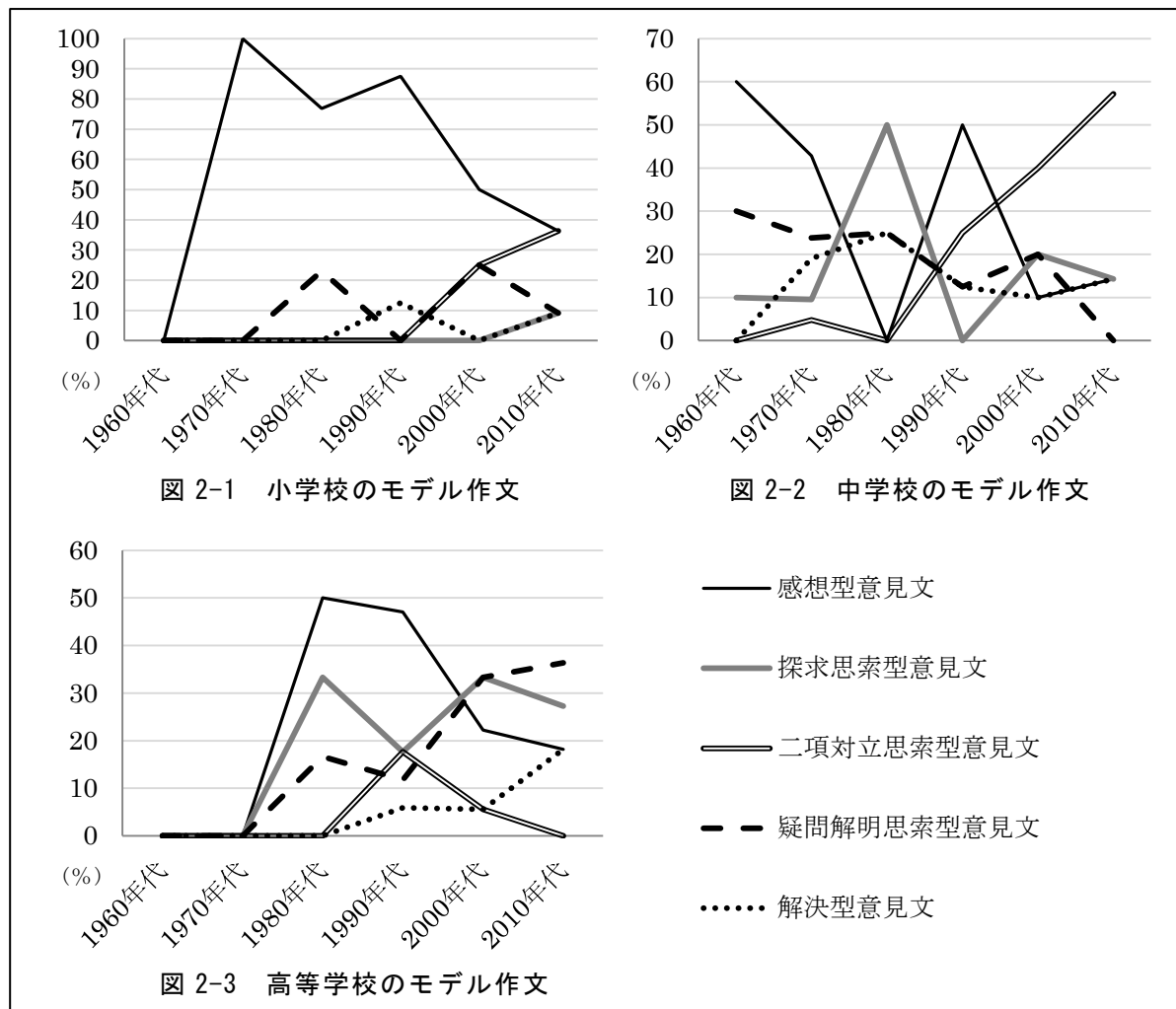


図2 小学校・中学校・高等学校における各意見文のモデル作文の経年変化

表2 小学校の年代別での各意見文のモデル作文の実数（単位：作品）

	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	2000年代	2010年代
感想型	0	1	10	7	4	4
探求思索型	0	0	0	0	0	1
二項対立思索型	0	0	0	0	2	4
疑問解明思索型	0	0	3	0	2	1
解決型	0	0	0	1	0	1
計	0	1	13	8	8	11

表3 中学校の年代別での各意見文のモデル作文の実数 (単位: 作品)

	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	2000年代	2010年代
感想型	6	9	0	4	1	1
探求思索型	1	2	2	0	2	1
二項対立思索型	0	1	0	2	4	4
疑問解明思索型	3	5	1	1	2	0
解決型	0	4	1	1	1	1
計	10	21	4	8	10	7

表4 高等学校の年代別での各意見文のモデル作文の実数 (単位: 作品)

	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	2000年代	2010年代
感想型	0	0	3	8	4	2
探求思索型	0	0	2	3	6	3
二項対立思索型	0	0	0	3	1	0
疑問解明思索型	0	0	1	2	6	4
解決型	0	0	0	1	1	2
計	0	0	6	17	18	11

#### 4. 考察と今後の課題

以上の調査の結果より、経年的に見るとすべての段階の学校で感想型意見文から他の意見文への推移が見られる。特に、感想型意見文が減少すると替わって思索型意見文が増加する傾向にある。

この原因の一つに、文科省の定める国語教育の目的の変化、および、OECDによる国際的な学習到達度調査であるPISA (Programme for International Student Assessment)の学校教育への影響が考えられる。1998年7月の教育課程審議会の答申では学校教育(小学校・中学校・高等学校)を通じて、「文学的な文章の詳細な読解に偏りがちであった指導」から「論理的に意見を述べる能力、目的や場面などに応じて適切に表現する能力」を重視することとする教育課程基準の改善の基本方針が打ち出された。こうして、国語教育の目的に、人間形成と言語教育の両面があるうち、言語教育の面に重きが置かれたことも一因であろう。更に、2000年以降のPISA調査の結果を受け、具体的に意見文を書く手順や説明が重視されるようになったことも大きな要因として考えられる。また、思索型意見文の中でも、小学校・中学校では、予め決まった課題に対し賛成する・反対するという二項対立思索型感想文が多く、高等学校では探求思索型意見文や疑問解明型意見文の割合が多いのは、思考力の問題や文章の難易の問題とも関連していると推測される。

最後に、本調査の結果と日本留学試験との関連について触れておく。日本の大学に留学を希望する外国人学生が受験する日本留学試験は、大学入学後の基礎学力を測る基準として重要である。日本学生支援機構が運営するウェブサイトの留学生支援のページには、2010年の日本留学試験(EJU)の過去問題サンプルが掲載されている。設問には「ニュースをネットで読むことと新聞で読むことについて比較し、意見を書いてください」とあ

る。これは、二つの対立した意見を比較し意見を述べるという点で、二項対立思索型意見文として分類可能なものと言える。そして、二項対立思索型意見文は中学校の国語で習熟することを期待されているものであるが、この意見文の内容に即した文章構造の特徴を明らかにすることにより、日本語母語話者の学習に適用可能と考える。

今後の課題として、調査の資料を用い、意見の類型に即してそれぞれの意見文の構造の特性を具体的に明らかにし、日本語教育として目標にすべき意見文とは何かについて考察していきたい。さらには、教科書における作文学習の他の文章ジャンルとの比較を通し、意見文の扱いを年代別・学校の各段階別にみていきたい。

(前川孝子まえがわたかこ・聖学院大学)

## 注

1. 具体的には、小学校・中学校は1958年(昭和33年)、高等学校は1960年(昭和35年)の学習指導要領を指す。
2. 本調査では作文の学習目標に「感想文」と記載されているものは、対象外としている。ただし、“感想・意見”とキーワードが書かれているものは、感想文か意見文かの判別が困難なため意見文のモデル作文とみなしている。
3. たとえば同じ感想型意見文といっても、小学校と高等学校では、要求水準が異なるが、本調査の類型化では、発達段階による語彙・表現・内容の難易については捨象した。
4. モデル作文が掲載されていた教科書の詳細は巻末資料表5を参照。
5. 同年代で出版元が同じ同一作文については1作品と数えた。また、出版元が同じ同一作文であっても年代が違う場合は、それぞれの年代で数を集計した。
6. 一方、1980年代には小学校と高等学校でモデル作文が急激に増加している。そのため、70年代まで集中的に中学校で意見文が学習されていたのが小学校と高等学校に分散されたようにも見えるが、学校別においても年代別においても調査対象とする教科書数の増減があるため相関関係を詳細に検討する必要がある。

## 参考文献

- 伊集院郁子・高橋圭子(2012)「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文の構造的特徴—『主張』に着目して—」『日本語・日本学研究』(2), 1-16.
- 大西道雄(1990)『意見文指導の研究』溪水社
- 大西道雄(1997)『作文指導における創構指導の研究』溪水社
- 佐々木泰子(2001)「課題に基づく意見の述べ方—日本人大学生の場合・日本語学習者の場合—」『日本語教育のためのアジア諸言語の対訳作文データの収集とコーパスの構築』平成11-12年度 科学研究費補助金 研究基盤研究(B)(1)研究成果報告書(課題番号 国11691041) 研究代表者 前田(宇佐美)洋, 219-230.
- 二通信子(2001)「アカデミック・ライティング教育の課題—日本人学生及び日本語学習者の意見文の文章構造の分析から—」『北海学園大学学園論集』(110), 61-77.
- Lee 風子(2006)「留学生の書く日本語意見文の分析—日本人学生との比較において—」『ことばとそのひろがり(4)』立命館大学法学会, 339-412.



調査報告

前川孝子/アカデミック・ジャーナル9(2017)64-72

日本学生支援機構「日本留学試験 (EJU) 日本語 (記述、読解、聴解・聴読解)」<[http://www.jasso.go.jp/ryugaku/study\\_j/eju/examinee/\\_icsFiles/afieldfile/2015/12/25/eju\\_2010\\_01question\\_jafl\\_1.pdf](http://www.jasso.go.jp/ryugaku/study_j/eju/examinee/_icsFiles/afieldfile/2015/12/25/eju_2010_01question_jafl_1.pdf)> (2017年2月28日)

文部科学省「国語、理数、外国語教育のこれまでの改善について」<[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/030/siryo/06080113/003.htm#top](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/030/siryo/06080113/003.htm#top)> (2017年2月28日)

引用資料

桐原書店 (2003)『展開 国語総合』作品名「日本人は英語を併用すべきだ」, 181-182.

三省堂 (2003)『高等学校国語総合 [現代文・表現編]』作品名「異国での喜び、手書きの便り」, 206.

三省堂 (2012)『中学生の国語学びを広げる二年』作品名「方言の『よさ』を見直そう」, 58.

大修館書店 (2013)『新編 国語総合』作品名「物に頼らず、心で人に接しよう」, 217-218.

明治書院 (2013)『高等学校 国語総合』作品名「新聞は省略語を使わないで」, 128.

巻末資料

表5 モデル作文が掲載されていた小・中・高等学校の教科書

	1961年	1971年	1980年	1992年	2002年	2011年
小学校	該当するモデル作文なし	学校図書 (1)	学校図書 (2) 教育出版 (2) 東京書籍 (1) 日本書籍 (4) 光村図書出版 (1)	大阪書籍 (2) 東京書籍 (1) 日本書籍 (3) 光村図書出版 (2)	大阪書籍 (1) 学校図書 (3) 教育出版 (2) 日本書籍 (1) 光村図書出版 (1)	学校図書 (2) 三省堂 (1) 教育出版 (1) 東京書籍 (2) 光村図書出版 (1)
中学校	三省堂 (2) 筑摩書房 (1) 光村図書出版 (1)	学校図書 (1) 三省堂 (2) 東京書籍 (3) 日本書籍 (2) 光村図書出版 (3)	三省堂 (1) 光村図書出版 (2)	学校図書 (1) 教育出版 (1) 東京書籍 (2) 光村図書出版 (2)	学校図書 (1) 教育出版 (1) 三省堂 (1) 東京書籍 (2) 光村図書出版 (3)	学校図書 (1) 教育出版 (1) 三省堂 (1) 東京書籍 (2) 光村図書出版 (1)
高等学校	1963-1965年 該当するモデル作文なし	1973-1975年 該当するモデル作文なし	1982-1983年 学校図書 (1) 第一学習社 (1) 大修館書店 (1) 光村図書出版 (1)	1993-1995年 旺文社 (1) 学校図書 (2) 角川書店 (1) 教育出版 (1) 三省堂 (2) 第一学習社 (2) 東京書籍 (1)	2003-2005年 教育出版 (2) 京都書房 (2) 桐原書店 (4) 三省堂 (4) 第一学習社 (4) 大修館書店 (2) 明治書院 (3)	2013-2015年 三省堂 (3) 第一学習社 (4) 大修館書店 (2) 東京書籍 (2) 筑摩書房 (1) 明治書院 (2) ピアソン桐原 (1) 数研出版 (2)

注1: 年は使用開始の年を指す。なお、教科書は3~4年で改訂される。

注2: 括弧内の数字は、モデル作文が掲載されていた教科書の冊数を示す。